

普通の知識人による普通の旅

——『公車紀程』——

伍 躍

乾隆十三年の正月十二日、西暦1748年2月10日に、一人の中国知識人が、友人らとともに故郷を離れ、およそ1500キロを離れている北京を目指して旅に出た¹。彼は、五ヵ月間にわたる旅行の間、毎日欠かさず日記をつけていたが、その日記とは、いま、中国南京図書館に所蔵されている『公車紀程』である。

『公車紀程』は乾隆十三年（1748）、浙江省嘉興府秀水県（現在、浙江省嘉興市）出身の徐昭が科挙試験受験のために上京する際の旅行日記で、一冊の抄本である。署名の「秀水徐昭 孫男錫可録」から、この日記は徐昭の孫・徐錫可が祖父の原稿に基づいて整理したものであることがわかる。「秀水」とは、徐昭の本籍、つまり嘉興府秀水県のことである。南京図書館所蔵の抄本が誰の手によってなされたのかは不詳であるほか、その内容は徐昭が書いた日記のすべてであるかどうかについても、残念ながら確かめることがまだできていない。しかし、日記のなかで、「皇」という字はいずれも「搢写」されていることから、清朝時代の抄本であるには違いない²。

「公車」という語は、紀元前の中国古典である『詩経』のなかにすでにあった。当初の意味は、諸侯の兵車であった。しかし、前近代の中国では、「公車」とは、北京で行われる科挙試験の会試に参加する受験者を指す用語であった。「紀程」とは、旅行記のことである。

明清時代は、日記、とりわけ旅行日記が盛んに書かれる時代であった。そのなかで有名なものを拾って言えば、歴史地理学名著としての『徐霞客遊記』がある。そして、おびただしい数の朝鮮朝貢使節の中国旅行記（燕行録）は、近年、その価値がはじめて認識されることとなった³。なお、徐昭が旅した大運河関係の旅行日記と言えば、朝鮮人の崔溥が書いた『漂海録』を含めて、枚挙に暇がない⁴。

この本の価値は、明清時代で数十万名ともいわれる「挙人」の一人が書いたものである、というところにある。これまで大運河関係の旅行記をはじめ、日記などについては、ほとんど官僚もしくは有名な知識人が書かれたものを中心に紹介研究され、徐昭のような無名に近い知識人が書いた内容の極簡単な、しかも文彩の乏しい旅行記については、あまり重視されていなかった。たとえば、近年、中国で出版された歴代の日記を紹介する『歴代日記叢談』⁵と『歴代日記叢鈔提要』⁶では、徐昭のこの日記についてまったく言及されていない。そもそも、本書のような必ずしも有名とも言えない人物が書いた日記は、蔵書家の興味を惹かなかったかもしれない。しかし、本書の重要性は、まさにここ、つまり無名の者が書いた無名の日記という点にある。我々は、その日記を通して、社会の末端に近い前近代中国の一地方の知識人がどのように受験旅行をしたのか、彼の目に映っていた18世紀の中国社会の姿はどのようなものなのか、などを知ることができる。この意味で、この僅か十数葉の抄本の日記は、その時代の中国ないしその時代に生きている普通の人々の姿を知るためのたいへん貴重な資料であると考えられる。

すでに触れたが、日記の著者が旅した目的は、科挙試験の会試を受験するためであった。以下では、まず徐昭の受験旅行に関連する科挙制度を概観し、そして日記の内容を紹介していきたい。

一、前近代中国科挙制度概観

日記の冒頭部分にある徐昭の履歴、および『(光緒)嘉興府志』の記載によれば、徐昭は、乾隆九年(1744)に浙江郷試に合格し、第九十四番目の挙人となったことがわかる⁷。

科挙とは、前近代中国における官僚資格選抜試験のシステムを指す用語である。前近代の中国では、科挙の試験は、三段階の試験からなるものであり、なお予備段階の試験もあった(図1参照)⁸。

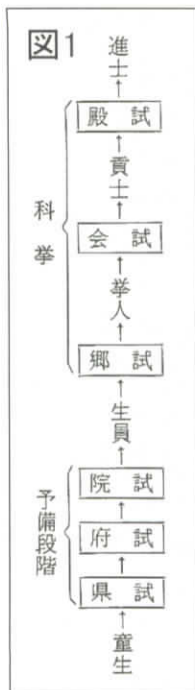
前近代の中国では、庶民は予備段階の試験に合格すれば、地元の学校(「儒学」)に入学することができる。「生員」と総称される儒学在籍者の身分は、学力テ

ストの成績によって分けられる。成績優秀な学生は奨学金（「廩」）の支給を受けられる「廩生」（県の儒学では20名）であり、その次は増広生（県の場合は同じ20名、「廩」の支給がない）、附生（定員なし）などであった⁹。徐昭は、その増広生の一人であった。科挙の第一段階（「郷試」）を受験するために、この生員の資格が必要とされる。「郷試」の試験は、三年に一度、子・卯・午・酉の年ごとに各省の省都で行われる（徐昭所在の浙江省は杭州）。「郷試」は、八月九日、十二日、十五日に全国一斉に行う。合格発表は、九月五日から二十五日の間で行われるとされる。その合格者は「挙人」の資格を授かれる。

前近代中国では、「金挙人」という諺があったが¹⁰、それは、挙人資格が黄金のようななかなか得られない貴重なものということを物語っていて、しかも科挙試験のシステムのなかで競争率のいちばん高い難関を意味することももある。この日記の著者徐昭は、その「金挙人」の一人である。

「挙人」の合格者は、省ごとに定数を定められた。浙江省のような教育が発達していた地域では、与えられた郷試合格者の定数は他省に比べて、比較的多かった。徐昭が郷試に合格した乾隆九年頃では、その数は「正榜」の九十四名、と「副榜」（追加合格枠）の二十一名、あわせて百十五名であった¹¹。浙江省での一度の受験者は約一万人程度ということを考えれば、挙人の競争率が約百倍であったことがわかる。そのため、「正榜」最後の第九十四番で合格した徐昭は、非常に幸運だったと言えるだろう。挙人合格の平均年齢は三十一歳であったが¹²、徐昭は挙人合格時にはすでに三十六歳になり、年齢的にはやや高かった。

郷試に合格し「挙人」になった人たちは、制度上、官僚ポストにつくことができるが、そのチャンスはまったくないとは言えないが、長く待たされるほか、与えられるポストのほとんどが「官品」（官僚のランク）の低いもので、さらなる昇進を望むことは非常に難しかった。そこで、より高い地位を獲得するために、さらに進んで北京で行われる「会試」に参加するのは一般的であった。



やや早い時期の記録によれば、北京に受験しにいく者は五千人程度にのぼることがわかるが¹³、この日記を書いた徐昭は、そのなかの一人であった。

会試は郷試の翌年、つまり丑・辰・未・戌の年に北京で行われる。試験会場は、紫禁城の東に位置する「貢院」とよばれるかなり広い施設であり、いまは中国社会科学院の所在地である。試験は三月九日・十二日・十五日の三日間で行われ、合格発表は四月十五日までとされるが、乾隆十三年は四月九日であった。その会試に間に合うため、郷試の合格者たちは、「挙人」に合格すると、急いで旅の支度をしなければならない。浙江省北部に住み、しかも大運河を利用できる徐昭の場合は、正月十二日に出発したが、中国の広大な領土を考えれば、正月の前に旅に出る者もいるとは思議なことではないだろう。

会試の合格者は、「貢士」という。競争率は、およそ十七倍であった¹⁴。これはいわばキャリアで、将来を約束された人たちであった。ただし、科擧の試験は、これで終わるわけではなかった。四月二十一日、最後の「殿試」は紫禁城の中で行われる。殿試と言われるのは、紫禁城の宮殿で行われることもあるが、さらに重要なのは、試験官は皇帝本人が務めるということである。もちろん、皇帝は自ら採点をするわけではないが、大臣に「読巻官」を任命して採点させる。殿試の合格者は「進士」という。徐昭らが地元から上京して目指したのは、いうまでもなく「会試」と「殿試」の合格のためにはかならなかつたと考えられる。

合格発表は、四月二十五日、皇帝が出御のうえ、紫禁城の中心——太和殿で行われる。一般的には、「会試」は合格者決定の試験であったのに対し、「殿試」は「会試」合格者の順番を決める試験であったと言ってよい。そのため、殿試で振り落とされる者はめったにいない。最も優秀な三人は「第一甲」として、直ちに「進士及第」を授けられ、その一番は「状元」、二番は「榜眼」、三番は「探花」と呼ばれた。この三人に次ぐものを若干名は「第二甲」として「進士出身」を授かれ、残りは「第三甲」の「同進士出身」であった。一度の合格者はおよそ三百名程度であり、総じて「進士」と呼ばれる。

その「進士」たちはさらに「朝考」に参加する必要があった。「殿試」までの試験が資格選抜試験あるいは合格者順番決定試験とすれば、これは、就職採

用試験と考えてよい。「第一甲」の三名は翰林院での任官が直ちに発令されるが、他の優秀者は、翰林院庶吉士としてさらに数年間勉強させ、将来の任用をまつことにする。これはいわば出世コースであった。「朝考」第二等の者は中央政府の下級官僚（「京官」）、第三等の者は地方官（「外官」）の県知事に任官された。

進士（挙人も）になれば、官僚となるのを約束されるほか、自分の家の前に高いアーチ型の門（「牌楼」という）を立てるための銀を支給され、本人とその家族にはもちろんのことであるが、一族および地元にとってこの上のないへん名誉なことであった。その進士（または挙人）の肩書が、はかり知れぬ富をもたらされる。この意味で、科挙に合格すれば、なみなみならぬ権力と名誉と富との一切を一挙に獲得できることが分かる。

ちなみに、本旅行日記の著者だった徐昭出身地の秀水県と隣の嘉興県からなる嘉興府城（現在の嘉興市）は、大運河沿いの歴史名城として知られているほか、清朝時代では科挙の試験で最高の学位だった進士を取得した人数は168名にのぼり、全国屈指の高級知識人の出身地としても知られている¹⁵。

しかし、徐昭の一族は少し寂しい。徐昭本人は、挙人に合格したが、進士にはなれなかったほか、おそらく無官のままで生涯を過ごした。『公車紀程』以外の著作は、いまだ発見されていない。徐昭の曾祖父・祖父・父親もいかなる科挙資格や名誉職も持っていなかったようである。徐昭の息子の状況はよくわからないが、彼の旅行日記を整理した孫の徐錫可は、その娘が地元出身の河南巡撫と結婚したため、規定により「通奉大夫」という名誉職を授けられた¹⁶。こうしたことから、挙人の資格しか持っていない徐昭はやはり「普通の知識人」と言えるだろう。

以下、『公車紀程』の内容に基づいて、徐昭の受験旅行とその見聞を見ていきたい。

二、『公車紀程』の内容

1、旅行の所要日数

日記の前に履歴が書いてある。書式にある「並無刑喪過犯冒籍違礙」（刑事

事件・服喪・過失・偽りの戸籍の使用・その他の違法行為がなし）の文言、そして身体特徴・学籍身分・尊属三代などから、会試受験の際に提出する書類の写しであったことが推測できる。

徐昭ら一行は、乾隆十三年正月十二日に故郷に別れを告げ、船に乗って出発した。彼らは大運河を北上し、途中、揚子江・黄河を横断した。二月四日に山東省南部の台荘で船を馬車に乗り換えてさらに北上し、二月十八日に盧溝橋を渡して北京に到着した。三月八日～十五日に会試に参加したあと、四月九日の合格者発表で落第を知り、徐昭らは四月十七日に北京を離れ、大運河を南下し、六月十一日に家に到着した。このように、徐昭は、会試受験のために五ヵ月をかけて、嘉興（秀水）——北京の間を往復した。北京での滞在はちょうど二ヶ月であったが、行きは水路＋陸路で三十五日間がかかっていたのに対し、帰りはすべて水路で五十五日間を要した。

徐昭より十年前のことであったが、乾隆二年（1737）正月二十日、その年の科挙試験で「進士」に合格した程穆衡は、受験のために地元の鎮洋県（現在、江蘇省太倉市）を船で出発し、二月七日に江蘇省淮安の北で馬車に乗りかえ、二月二十七日到北京郊外の盧溝橋に到着した。蘇州の東にある鎮洋は、嘉興に比べて北京までの距離は少し近い（約1400キロ）が、それでもおよそ三十七日間がかかった¹⁷。しかし、程穆衡は、途中、江蘇省の北部で「車行」（運送業者）に騙され、二・三日程度遠回りをされることもあったから、18世紀に江南——北京間の旅行に必要な日数はおよそ三十五日前後であることが察知できよう。

2、交通線

本書は江南——北京間の旅行日記であるため、十八世紀中期の江南——北京間の交通線を知るうえでも有益な史料である。

徐昭ら一行は、乾隆十三年（1748）正月十二日に出発して、呉江→蘇州→無錫→鎮江に至り、そこで揚子江を渡った。この道は、少なくとも明代以来、「江南水路」、とりわけ浙江省の省都である杭州から鎮江への幹線道路（「杭州府官塘至鎮江府水路」）としてずっと存在していた¹⁸。

揚子江を渡った後、一行はさらに北上し、大運河で揚州→邵伯→高郵→清江

浦→宿遷を経て、山東省の台荘（現在の台児荘）に至った。宿遷までは明代の路程書で記されている路線と一致する¹⁹。宿遷から台荘を経て山東省に入る路線は、明代万暦三十二年（1604）以後開通したものであった²⁰。

一行が台荘で船を馬車に乗り換えて北上したのは、おそらくこれが当時の一般的な手段であったことが推測される。以下で紹介するが、山東省内の大運河は地形が高く、水量が比較的少ないため、船の航行が一時中断されることがしばしばあった。そのため、三月の「会試」に間に合うように、急いで北上する受験生たちは、ほとんどそのあたりで水路をやめ、陸路を北上し続けた。一行は、台荘より滕県→界河橋→高呉橋→汶上県→東平県→茌平県→富荘駅→河間府→任邱→雄県→良郷→盧溝橋を経て、北京に至った。この路線は、基本的には明代以来の幹線道路である²¹。

こうして北上したことに対し、一行は北京より帰郷する際に、北京東の張家湾より船に乗り、明代以来の「北京由漕河至南京水駅」と「杭州府官塘至鎮江府水路」の路線に沿って大運河を南下した²²。

宿泊については、徐昭ら一行は、北上の時、および南下時の北京～山東省南部の間では、夜になって「客店」に泊まったり（陸路）、船を止め船中にそのまま宿泊したり（水路）したのに対し、帰郷の旅の後半は、ほとんど船はとまらず一気に南下した。おそらく江南の大運河がかなり整備され、船の乗組員にとって夜の航行もそれほど負担にはならなかったのではないか。

ここで見られるように、一行が利用した大運河を幹線とする北京—揚州—杭州間の水陸交通網は、明代以来形成したものであり、途中の宿泊施設も整えられていた。日記を読む限り、途中の宿は「寛敞潔淨」（二月十六日）であったという。しかも徐昭ら一行が、五カ月にわたる旅行の間に、強盗から被害を蒙ることは一度もなかった。我々は、徐昭のこうした体験から、乾隆十三年頃の大運河沿線の社会状況が基本的に安定していたことを読み取れる。

3、山東巡幸の乾隆帝とすれ違い

徐昭は、乾隆帝の「東巡」（山東巡幸）について前から知っていたらしい（二月七日）。一行は、北上途中の直隸南部で乾隆帝の行列とすれ違った。ここで

乾隆帝の山東巡幸について簡単に触れておきたい。

乾隆十三年の山東巡幸は、乾隆帝の個人生活、およびその後の政治運営にとって、非常に重要な意味をもつ出来事といえよう。

乾隆十三年は（1748）、乾隆帝の個人生活にとって忘れることのできない年といえることができるだろう。不吉な兆しは乾隆十二年（1747）の大晦日にあった。本来は一家団欒の日になるはずだが、二歳未満の皇七子永琮が天然痘で死去した。永琮の生母、雍正五年（1727）に乾隆帝と結婚し、死後に本人生前の希望通り「孝賢」の諡号を送られた皇后富察氏は、女性として、そして母親として、あまりにも不幸であった。彼女は、十年前、長男（皇二子）で皇太子に指名された永璉を失った。ここに来て、次男も亡くした。乾隆帝にとって、わが子の夭折が心に与えた打撃はかなり深刻なものであった。それは、乾隆帝が嫡子の永琮を皇太子に指名しなかったからである。乾隆帝は、皇位継承者の突然の死を悲しく思うとともに、皇后の健康にも心配していた²³。しかし、乾隆帝にとって、その悲劇はこれで終わるわけではなかった（後述）。

二月四日、つまり徐昭一行が台荘で船から馬車に乗り換えた日に、乾隆帝は、皇太后・皇后と一緒に山東巡幸のために紫禁城を出発した。乾隆帝の山東巡幸の目的地は、泰山と曲阜であった。山東省中部に位置する泰山は、標高1533メートルでそれほど高くないが、歴代天子が封禪の儀式を行う名山として古くから知られている。封禪とは、秦の始皇帝が始めた、天子自ら天を祭る儀式を指す用語であり、いわば自分の支配を正当化するための手段であった。曲阜は、いうまでもなく孔子の生まれ故郷である。乾隆帝一行は、紫禁城を離れたあと、徐昭一行とは逆方向をとって南下して、二十四日で曲阜に入り、二十五日で泰山に登った。『乾隆帝起居注』などには、乾隆帝山東巡幸の路線が記されている²⁴。徐昭一行の北上に関する区間の宿泊地は表のとおりである。

これによれば、徐昭ら一行は乾隆帝の巡幸行列とすれ違ったのは二月十二日と十三日のことがわかる。

二月十三日、徐昭ら一行が北上途中で、「道中扈從充塞、車馬不絶」と、道路上おびただしい侍従が溢れ、車馬が次々と到着した光景を目撃した。昼休憩の「漫河」に着いたら、「已無隙地」、と立つところさえない、という人間と車

普通の知識人による普通の旅（伍）

日にち	乾隆帝一行（南下）	徐昭ら一行（北上）
二月四日	董公菴	台莊
二月五日	盧村	陰平
二月六日	当陌村	滕県
二月七日	高橋	鄒県
二月八日	雄県十里舖	汶上県
二月九日	任邱県五里舖	東阿旧県
二月十日	河間府	荏平県
二月十一日	盧家莊	腰站
二月十二日	阜城県	南劉智廟
二月十三日	景州七里舖	富莊駅
二月十四日	景州七里舖	河間府北二十里舖
二月十五日	德州七里莊	雄県
二月十六日	靳家莊	三家店
二月十七日	孟家楼	良郷
二月十八日	李家莊	盧溝橋

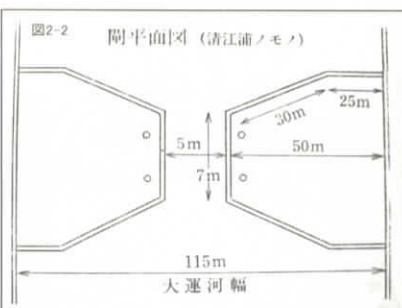
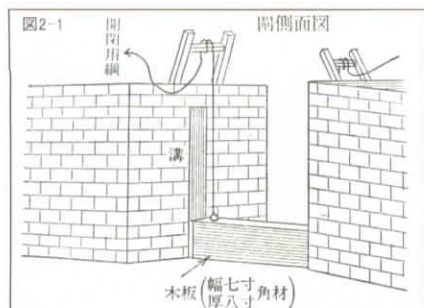
馬の混み合う状況に出会った。彼らは、ここで皇帝がすでに景州に到着したことを知った。翌日の十四日、徐昭は同行者万循初との唱和のなかで、「聞駕東巡詩」を詠った。さらに十五日、乾隆帝一行はすでに山東省の德州に入ったが、北上し続けた徐昭ら一行は、雄県宿泊先の客店で「馱騎充斥、幾無宿處」、溢れた侍従たちにあい、ようやく泊まることを確保したという。

乾隆帝本人についての直接の記録は、徐昭の日記にはない。またその後の話だが、乾隆帝一行は、泰山での行事を終え、帰京途中の德州で、皇后の富察氏が三月十一日に三十七歳で死去した。これについて徐昭は三月十八日の日記に記している。皇后富察氏の死は、乾隆帝にとってのこの上ない打撃であった。その後、皇后を追悼するために、乾隆帝は生涯にわたって百数十首の詩を書き残している。皇后の死は、単に乾隆帝個人の不幸にとどまらなかった。これを契機に、乾隆帝は、政治の方針転換を行い、「大阿哥」（皇帝の長男）を譴責したほか、数々の大臣を厳しく処罰したという²⁵。

4、大運河風物の描写

徐昭ら一行は、旅途中三ヶ月の七割以上にあたる七十五日間が大運河の旅であった。彼らは北京と杭州を結ぶ大運河の嘉興——杭州間を除いて、大運河のほぼ全区間を走破した。途中、呉江（正月十四日）・蘇州（正月十五日・小正月）・鎮江（正月十八日）・揚州（正月二十二日）などで名所旧跡を観光した。徐昭は持参した「紀程旧本」をもとに地名の考証も行っている。彼らはまた、帰郷の途中で、直隸（河北省）の南部で三日連続して「葉王会」という地方の祭りを見た（四月二十六日～二十八日）。「葉王会」は、漢方医学の神とされる孫思邈（581-682）を記念する祭りとして、全国各地で毎年の四月下旬に行われる行事である。その後、山東省南部の済寧で、徐昭は、大運河閘門を開放するのを待っている僅かな間も上陸し、観光や飲食して、船旅の疲れを癒した。

大運河についての記録のなかでいちばん重要なのは、水面の高低差を調節する「閘」、つまり閘門である。大運河は、中国東部の南北を結ぶ交通な幹線であり、江南の物資を北京へ運ぶための、いわば王朝支配の生命線でもあった。しかし、そのほぼ中央部分に位置する山東省では、標高が比較的高いため、閘によって水面の高低差を調節して、船の航行を維持させる必要があった。東亜同文書院が1921年に行われる大運河調査の報告書によれば、「閘」は、「甲、乙両地間ノ水面ノ差ノ甚ダシキ場所、及ビ水量を貯蔵スル必要ノアル処ニ設ケラレタルモノ」と説明している。なお、東亜道文書院が調査した1921年には、江蘇省の北部に三つ、山東省に二十七の「閘」が実際に機能している（図2-1、図2-2参照）²⁶。その「閘」を管理するために、「閘」ごとに「閘官」と「閘夫」



が配置された。

閘についての説明は、これ以上省略したいが、彼が書き記している帰郷途中で経過した「閘」の数は五十七（山東省内は四十七）にのほり、旅行記に記される大運河の閘門の数としてはかなり多いものであった。これは大運河の研究にとって大いに参考になるものである。詳細については日記本文を参考されたいが、ここで一例をあげることにとどめたい。

徐昭ら一行が帰郷の途中、「漕舟」の北上に会った。「漕舟」とは、江南から北京へ物資を運ぶ船である。その船が大運河を通過して、定期的に物資を北京に届けるのは、前近代中国の歴代王朝にとって、国家支配の成立にかかわる重要なことであり、国の生命線とも言うべき大運河がもつ一番重要な役割でもあった。大運河、とりわけ大運河の水量が不足しがちな山東省内においては、漕舟を優先に通過させるために、ほかの船、とくに南下の船はすべて漕舟が通過するまで待たさねばならない。五月二十四日、南下する徐昭ら一行が、山東省南部済寧の「天井閘」（図3参照²⁷）についたところ、その閘門はすでに閉じられ、前に進むことができなくなった。これは、「天井閘」とその北約35キロ先の南柳閘との間の水量を保つ措置である。北上の漕舟が「南柳閘」をすべて通過したのを待って、南下の船ははじめて航行することができる。結局、徐昭ら一行は、五月二十四日から二十九日まで済寧で待たされていた。



ほかに注目したい記事は「閘官」である。先に紹介したが、「閘」ごとに「閘官」が配置された。閘官は、「閘夫」と呼ばれる数名のスタッフを率いて、閘の管理にあたっている。旅行記には、閘夫と通行する船の関係を示す記事が書き記されている。その徐昭ら一行は、山東省の李海務閘でトラブルに巻き込まれた。「総河官眷」（運河を管理する河道総督の親族）は無理やり「閘」を通過

したあと、閹夫は、なぜかほかの船に賄賂を要求した。結果、閹夫は通行する船の乗組員と殴り合い、けんかとなった。翌日、船がその李海務閹から約5キロ下流の周家店閹にさしかかったところ、李海務閹の「閹夫」が追いかけてきて、昨日のけんかで負傷したことを理由に、取調べしようとし、応じなければ航行を許さないと脅し、双方は、さらにけんかした。そこで、「諸船」が商議した結果、皆から金銭を出し合い閹官に賄賂を出した。これでようやく通行が許されるようになった（五月十二、十三日）。ここからは大運河での航行の一場面を読み取れる。

なお、徐昭ら一行が北上途中で通過した山東省南部の一部地域では、前年の乾隆十二年（1747）に飢饉が発生した。二月七日、一行は、界河橋についたところ、大勢の「飢民」に取り囲まれ、一行が乗っている馬車から食糧を強奪する者もいた。その日の夜、孟子の故郷である鄆県では、「官方煮賑、流亡載道」、地方政府が道に溢れる難民にお粥を配っている様子を目撃した（二月七日）。ところが、翌日になって、一行が宿泊先の汶上県で見たのは、「飢荒」のまったくない「満盃白飯搏香雪」の「景象」であった（二月七日）²⁸。帰途の五月二十六日、徐昭は疫病発生後の済寧で観光したところ、葬式を行う「麻衣素冠」をする人々を見た、という。

5、滞在中の北京

徐昭は、二月十八日から四月十七日のあいだ、約二箇月間北京に滞在した。前近代の中国、とくにその絶頂期といわれる乾隆時代（1736-1795）では、経済成長にともない往来は便利になったとはいえ、江南の大運河沿いに住む一挙人は、天子のいる北京を訪れることはやはりそれほど容易なことではなかった。朝鮮からはるばるやってきた燕行使たちと同じように、徐昭も観光や買い物に楽しんでいった。

北京郊外の盧溝橋についた二月十八日、「験文」、つまり地元の秀水県が発行した受験文書の検査を受けた²⁹。午後、北京城内に入り、「米市衛衝保安寺街豊盛堂潘家客店寓」に宿泊した。そこはいわゆる「外城」（または南城）であり、つまり漢人が居住する区画であった。翌日、彼は友人とともに、すぐ「王老師」

のところへ挨拶しに行った（二月十九日）。その「王老師」とは、授業の先生ではなく、徐昭が挙人に合格した乾隆九年甲子科の浙江郷試の「正考官」（試験官）を務めた内閣学士王会汾（1704-1764）である。前近代中国の慣習では、郷試に合格した挙人は、試験合格時の試験官を「老師」（または「座師」と称し、その「老師」の前で自ら「門生」と自称する。それは、自分の才能を認めてくれた試験官に対し知己の恩を感じることであり、その「老師」を中心とする利益集団の結成を意味することもある。荒波にさらわれやすい官界のなかで、その「老師」と「門生」が、生涯にわたって一種の堅い師弟関係を結び、互いに助けていくことは、前近代中国における官僚選抜試験と政治の関係を物語っている。そのため、徐昭は北京に到着してすぐ「老師」を訪ね、二ヶ月におよぶ北京での滞在期間であわせて計四回の挨拶を行っている（二月十九日、三月一日、十八日、四月一日）。

徐昭は三月八日～十五日の間で会試を受験した。入場する三月八日の朝、彼は貢院の前で驚くべき光景を見た。官吏が入場検査を行う際に、ある「江西老儒」の持込物から原稿「一紙」を発見した。その結果、あの「江西老儒」は受験資格を直ちに剥奪されたうえ、首かせを掛けられ、試験場の前で見せしめにされたという（三月八日）。

受験のほか、徐昭は北京で観光などをした。「会試」の前に、彼は、礼部に行ったり（三月一日）、琉璃廠にいて「考具」（試験用品）を購入したりして（三月四日）、忙しい日々を送る傍ら、その時代の文人が必ず遊覧しにいくと言っているほどの「黑窯廠」と「陶然亭」を観光した（三月三日）。試験の期間中にある二回目と三回目試験の隙間で、彼は試験場の貢院に近い「観象台」に行つて見学しようとした（三月十三日）。合格発表の前日には、徐昭はもう一度憫忠寺に行つて、釈迦の誕生を祝う「浴仏会」を見物した（四月八日）。ほかに、徐昭も北京城内のいくつかの観光名所に行ったが、ここでは省略したい。

観光の傍ら、彼は北京で買い物も楽しんでた。すでに紹介したように琉璃廠で「考具」を購入したほか、「雕角小刀」（三月二十七日）と「柿漆扇」も購入した（三月二十九日）。そして、「小市」までには何度も足を運び、「灰鼠袍一件」「氈衣」「馬鬃」「扇套」を購入した（三月二十四日、二十八日、四月四日）。

ほかに「全浙會館」で友人と会い、一緒に「廟市」に行って美術品の「紹鼠畫卷」を購入し（四月三日）、「前門果行」においては江南ではまだ珍しかった「葡萄」「杏仁」を購入した（四月六日）。

こうした観光や買い物の記録とは対照的に、三月十七日に死去した皇后富察氏についての記録はわずかであった。それは、三月十八日に「王老師」の宅に挨拶に行ったが、皇后服喪のため、会うことができなかった、という。

もちろん、我々が見たこの日記は、徐昭が書き記した原文のままであるかどうかはわからない。整理者によって削除された可能性も否めない。徐昭は北京で、地元出身者を中心に三十数人と交友し、ともに観光したり、食事したりして過ごした。そのなかに六十歳で挙人に合格し、七十歳を超えてもなお進士合格に挑戦する「強健」な老人もいたという（三月十三日）。彼の日記の行間から受験生特有の緊張感と落第後の喪失感はまったく感じられない。

徐昭は知らないだろうが、彼が受験旅行した頃、彼と同じように挙人の資格しか持っていなかった呉敬梓（1701-1754）は不朽の名作『儒林外史』を書き終えている。科挙制度の時弊を痛快至極に批判するこの風刺小説を、徐昭はおそらく読んだことがないだろう³⁰。もちろん、その小説に登場する個性豊かな人物たちにくらべて、われわれの眼に映っている徐昭は、極「普通」の知識人であった。普通に勉強し、普通に挙人に合格し、普通に上京して、普通に落第して帰郷した。こうした「普通」の人物は、その時代の何万、何十万もいる「普通」知識人の代表として捉



えることができるだろう。まさしく現代の普通の一市民と同じように、普通に生活し、普通に大学へ通い、そして普通に就職して普通に結婚する。言い換えれば、「范進中挙」の話は確かに面白いが、范進に比べると、徐昭のような人物はやはりその時代に生きていた数十万名の「普通の知識人」の代表的存在であると言えるだろう。

なお、この本の最後の数葉は「進京水路計程」の題名で、嘉興府→呉江駅→潯墅関→無錫県→常州府→丹陽県→鎮江府、計四百八十六里（243キロ）の路程が記されている。それは未完成であるが、地名のほか、その地の産業や物価も書いてある。

以下、『公車紀程』の全文に標点を施し、同仁の参考批判に供したい。内容の校訂については、他日に譲りたい。なお、大運河、北京、嘉興などの位置関係について、図4を参照されたい³¹。

- 1 北京までの距離は、『大清仕籍全編』（乾隆二十八年刊本、第二冊、浙江、嘉興府、第151a頁）による。
- 2 撮写とは、皇帝にかかわる文字を書くに際して、行をかえて一字（「単擡」）ないし二字分（「双擡」）他の行より上げて書く、という清朝時代の書写規定である。
- 3 その一例として、夫馬進「日本現存朝鮮燕行録解題」（『京都大学文学部研究紀要』、第42号、2003年、第127-238頁）を参照されたい。
- 4 『漂海録』についての研究紹介は多数あるが、最近のものとしては范金民「朝鮮人眼中的中国運河風情」（21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第二回報告書I歴史編『人文知の新たな総合に向けて』、京都、京都大学大学院文学研究科、2004年、第21-60頁）がある。
- 5 陳左高著、上海、上海画報出版社、2004年。
- 6 俞冰編、北京、学苑出版社、2006年。
- 7 『（光緒）嘉興府志』（光緒三年刊本）、卷四十七、選舉志、第6a頁。
- 8 以下の著書を参考した。①宮崎市定『科挙』、中公新書、1963年。②平凡社中国古典文学大系『儒林外史』（東京、平凡社、1968年）、稲田孝「解説」、第489-500頁。
- 9 『（光緒）大清会典』（台北、新文豊出版公司、1976年）、卷三十一、礼部、第314頁。
- 10 （清）顧公燮『丹午筆記』（南京、江蘇古籍出版社、1999年）、第68頁。
- 11 『（乾隆）大清会典』（乾隆年間内府刊本）、卷三十一、礼部十二、儀制清吏司、貢舉、第9a頁。
- 12 張仲礼著、李榮昌訳『中国紳士』（上海、上海科学院出版社、1991年）、第134頁。本書の初刊は1955年。Chung-li Chang, *The Chinese Gentry: Studies on Their Role in Nineteenth-Century Chinese Society*. University of Washington Press, Washington, 1955.
- 13 張廷玉『澄懷主人自訂年譜』、卷四、『張廷玉年譜』（北京、中華書局、1992年）、第65頁。

- 14 乾隆二年科挙試験の合格者317名であった。その年の正考官の一人であった張廷玉は、「是科多士、雲集羣下者、較曩為盛。上科應試者四千五百數十人、今則增至五千四百人」と書いて記している（張廷玉『澄懷堂主人自訂年譜』巻四、第65頁。これで計算すれば、 $5400/317=17.03$ 人、凡そ十七人に一人が進士に合格するということがわかる。
- 15 何炳棣著、寺田隆信ら訳『科挙と近世中国社会』（東京、平凡社、1993年）、第249頁。本書の初刊は1962年。Ping-ti Ho, *The ladder of success in Imperial China : aspects of social mobility, 1368-1911*, Columbia University Press, 1962.
- 16 『(光緒)嘉興府志』、巻四十九、選挙六、第20b頁。
- 17 程穆衡『燕程日記』（上海、上海古籍出版社、1983年）、第187-273頁。北京までの距離は、『大清仕籍全編』（第二冊、江蘇、太倉州、第97b頁）による。
- 18 (明)黄汴『一統路程図紀』、巻七、江南水路、杭州府官塘至鎮江府水路、楊正泰『明代駅站考（増訂本）』（上海、上海古籍出版社、2006年）、第265-266頁。
- 19 (明)黄汴『一統路程図紀』、巻五、江北水路、南京由漕河至北京各閘、第244-245頁。
- 20 史念海『中国的運河』（西安、陝西人民出版社、1988年）、第321-325頁。
- 21 (明)黄汴『一統路程図紀』、巻一、北京至江西広東二省水陸路、第208頁。
- 22 (明)黄汴『一統路程図紀』、巻五、江北水路、北京由漕河至南京水駅、南京由漕河至北京各閘、第243-245頁。
- 23 『清高宗実録』、巻三百五、乾隆十二年十二月乙酉。
- 24 中国第一歴史档案館編『乾隆帝起居注』（桂林、広西師範大学出版社、2002年）、第7冊第27-36頁。
- 25 南炳文ら編『清史紀事本末』（上海、上海大学出版社、2006年）、乾隆朝、孝賢皇后去世風波、第1606-1609頁。
- 26 谷光隆編『清東同文書院大運河調査報告書』（豊橋、愛知大学、1992年）、第454-455頁。
- 27 『清代京杭運河全図』（北京、中国地図出版社、2004年）。
- 28 実は、その年の三月二十二日、山東巡幸より北京に戻った乾隆帝は、山東省で救済資金を調達するための捐納を実施させた。『清高宗実録』、巻三百十一、乾隆十三年三月丙午。
- 29 乾隆二年の会試に参加した程穆衡も盧溝橋で文書の検査を受けた。『燕程日記』、第270頁。
- 30 『儒林外史』が抄本の形ではじめて出回ったのは、乾隆三十五～三十六年（1770-1771）頃とされる。この頃、徐昭はもし生きていたとすれば、およそ六十二歳であった。李漢秋『『儒林外史』的版本及其沿遞』、『儒林外史』（上海、上海古籍出版社、1984年）、第1-15頁。
- 31 図4は、『日本大百科全書』14巻（東京、小学館、1995年）に載っている大運河の地図（第325頁）を参考して作成したものである。

公車紀程 乾隆戊辰年

秀水徐昭

孫男錫可錄

甲子科浙江中式第玖拾肆名舉人徐昭，時年肆拾歲，身中，面白，微鬚，係嘉興府秀水縣報忠坊民籍，由秀水縣學增廣生，習書經，身家並無刑喪過犯冒籍違礙。

曾祖時升 祖炳 父城

戊辰正月十二日，午後，嘉善錢年兄廷耀（名揆）同其同邑支廷揆兄（名浩然，係浙江戊午舉人）到舍，約伴同行。黃昏，放舟至東接官亭過船。漏下二鼓，萬循初兄到，同宿舟中。

十三日，辰刻，錢廷兄至船頭相訪，曹汝咸表兄邀飯。午刻，走答錢年兄，而褚紹兄亦至，遂登舟放行。錢、支二君自為一舟，同宿集慶寺。

十四日，早行。午刻，至吳江，遊華嚴寺，過垂虹橋，訪三高祠不得，入東門登城，由北門下。至三里橋上船。晚泊覓渡橋，見馬燈。

十五日，早至闔門，嘉善支、錢二君並舟同行。午後，至虎邱，遊山塘。黃昏，東平候祠有燈。復至千人石，扣山門，臨月而回。與曹汝咸、褚紹可、萬循初各成詩五首。

輕風緩送孝廉船，七里山塘趁晚沿，花市近連燈市接，月光澹映水光圓。其一。
元宵燈火競繁華，長笛橫吹小鼓搗，寶月光中嘶寶馬，香塵暗裏走香車。其二。
美酒微醺夜氣溫，維舟閑步過黃昏，山行踏碎梅花影，老衲重開月下門。其三。
大石如磐一劍開，闔廬霸業剩荒苔，燈旗火馬兒童戲，曾似吳姬掠陣來。其四。
同舟分管賦春燈，燭地燈殘月更澄，良會由來非易得，清宵莫厭酒如澆。其五。

十六日，過澆墅關朝飯。夜宿無錫江尖，見月蝕。

十七日，晚泊奔牛。至靈官廟觀燈，屏殿前有銀杏四株，大可六七抱。土人云，梁武帝曾避追兵於此。

十八日，至臨口，觀石牛。舟人云，牛在奔牛河下奔來，今仆闔口兩岸麥壘上，其形有翼，無角，長鼻，四蹄。意是古人厭水之物，相傳訛為牛耳。及閱紀程舊本曰，臨口實麟口，有兩石麟而命名。然則是麟也，非牛也。余以此說為近。

是夜，泊鎮江京口。

十九日，辰刻，渡江。午後，至揚州鈔關。

二十日，飯後，入城。教場觀操，登南城樓。

廿一日，辰刻，過關入城，傍晚上船。

廿二日，進徐寧門，出天寧門。策蹇平山堂，登真賞樓，過棲靈寺。寺中有洛社堂，堂前多植牡丹。再登萬松亭，至第五泉。下山至法海寺，遊賀氏新闢東園，園有春雨堂、雲山閣、芙蓉泚、日躡臺、品外第一泉諸勝。還至紅橋，橋重築未成，旁有廢圃，見疏梅零亂，亦多野趣。再叩斗母宮，歸至舟中，已上燈矣。

廿三日，午後，解維。同遊者各補梅花詩數首。是日，過邵伯，夜行。

探梅得得向城陰，策蹇高岡逕漸深，為問廬陵遺勝處，僕夫遙指隔松林。平山堂觀梅。

路折峰迴信馬來，蜀岡斷處見平臺，歐公千載風流遠，幾樹梅花歷亂開。平山堂梅。

洛陽春色最繁華，魏紫姚黃散綺霞，應是山靈愛高潔，未教濃豔溷梅花。洛春堂梅。

名園新築伴招提，曲徑紆廊逕欲迷，竹裏梅花最清絕，霏霏冰雪夕陽西。東園梅。

古觀棲心絕往還，梅花深處閉柴關，客來剝啄因何事，童子開門雪滿山。斗母宮梅。

何處吹簫問玉人，隋宮金粉化香塵，荒園剩有疏梅影，點綴紅橋寂寞春。紅橋梅。

廿四日，曉抵高郵，夜泊汎水，大風。

廿五日，曉雨，宿平河橋。

廿六日，大風，午後，過板閘關。晚宿清江浦。

廿七日，同紹兄候沈年伯。午後，過河，宿北河口。舟人以福物助分餉。見對岸失火。

廿八日，宿眾興集。

廿九日，午後，守風，夜過白楊河。

二月初一日，飯後，過宿遷關。夜泊九龍廟，大風。

初二日，宿半片店，起風暴，漕船呼噪，各舟加楫，乃安。

初三日，宿河成閘，水甚急。

初四日，至臺莊，宿車馬行馮店。

初五日，辰刻，登車。分三車，錢、支二君為一車，曹、萬二兄為一車，余與褚紹兄同車。馬連屯尖，陰平宿。

初六日，三鼓啓行。行三十里，天明，至臨城，尖。遇雨，宿滕縣南沙窩。時流亡載道，樹皮盡剝。

初七日，四鼓啓行，二十里，天明，至界河橋，尖。飢民有向車中奪餅而食者，有要截僕從而強討者。夜宿鄒縣東灘店。官方煮賑。流亡載道，因紀以詩。
雨灑沙飛染客旌，荒田一望野田平，家磨榆粉生何賴，路啜匏漿死亦輕。歉歲幾時因碩鼠，樂郊何處試遷鶯，窮黎莫嘆瑤圃隔，二月東巡為省耕。

初八日，五更登車，行十里，天明。至高吳橋，尖。晚宿汶上縣北關外。白粒清謳，絕無飢荒景象，亦以詩紀之。

高城遙望見懸旌，雨潤青青麥壟平，畜牧及時牛力壯，馳驅任意馬蹄輕。滿盂白飯搏香雪，半闕清歌嘯曉鶯，誰道飢荒近鄰邑，春深二月未能耕。

初九日，五更上車，行十里，天明。至東平縣，尖。路中買竹葉石硯。晚過馬抱泉。宿東阿舊縣。

初十日，晚行至沈河，橋圯，以船渡。至銅城，尖。宿荏平縣。

十一日，曉行，新店，尖。腰站，宿。

十二日，曉行，苦水鋪，尖。南劉智廟，宿。

十三日，四更啓行。是日，駕至景州，道中扈從充塞，車馬不絕。至漫河尖處，已無隙地。黃昏，至富莊驛，宿。

十四日，五鼓啓行，商家林尖。河間府北二十里鋪宿。補和萬循初聞駕東巡詩。（荏，荏俗字，音馳。亦可作荏）。

六龍勤夙駕，東望岱宗高；端拱原無逸，巡方豈憚勞。花村迎劍戟，草野望旌旄；民樂皇心豫，衢歌寫素毫。

十五日，曉行。任邱，尖。未後過趙北口，淡月初昇，兩河如鏡。長堤緩步，平橋十一，皆朱闌護之，宛似畫圖。晚至雄縣店中，驛騎充斥，幾無宿處。

十六日，曉行，白溝河，尖。三家店，宿。店頗寬敞潔淨。

- 十七日，曉行，狹河，尖。過琉璃橋，見鐵篙。宿良郷。登山，看法相寺塔。
- 十八日，曉行，至盧溝橋，驗文。長新店，尖。午後，至都順成門，寓米市衚衕保安寺街豐盛堂潘家客店寓，錢、支兩君分居德豐客寓。
- 十九日，飯前，錢廷兄到寓，同去候王老師。午後，候張日乾表兄暨錢受之年兄。
- 二十日，進前門，至東四牌樓正藍旗官學陶爾音兄處道喜，晚飯。自崇文門歸寓，燈已上。
- 廿一日，候陸根堂先生，送于安貞書信。王老師遣人以名帖至意，遂同緒紹兄往候許酉峰，寫王師母公奠傳單。
- 廿二日，支廷兄到寓中來候。午後，朱玉堦來候，酉峰來答。
- 廿三日，日乾表兄同受之兄來答，同汝咸表兄去候玉堦先生。
- 廿四日，飯後，德豐答候支、錢二君，不會值。
- 廿五日，王店、王履仁兄來候，一茶而去。
- 廿六日，陳離嗜兄同馮太占兄到寓來候。
- 廿七日，往蠟子廟候朱儕鶴先生，送郁邁村先生書。
- 廿八日，姚斗南年兄來會。
- 廿九日，往延壽寺，答盛容山、吳曉君兩兄。
- 三十日，姚御天先生自徐州到京，至寓中，已無下處矣。
- 三月初一日，往王老師公館請安，不見。飯後，同曹表兄至禮部過堂，中途雨雪而返。過午，雪甚大。
- 初二日，早起，頗寒。午後，往爛麵衚衕買雨帽。大街遙見西山積雪未消。
- 初三日，飯後，同曹表兄登黑窯廠，啜茗於陶然亭。表甥曹景華到寓，緣未歸，不會而去。下午，又來，詢鄉間事。同至鐵門，小飲而別。
- 初四日，至琉璃廠買考具，回寓。聞王宋賢已到京矣。
- 初五日，寄行李於朱玉堦先生處。
- 初六日，飯後，僱車至小寓，寓在崇文門內裱衚衕鐵匠營蘇宅。早有微雨，上車後已晴。
- 初七日，嫩晴。同循初兄至泡子河觀柳，夜有小雨。
- 初八日，辰刻，入場，搜檢甚嚴。西磚門有江西老儒，誤帶策稿一紙，竟枷示。余歸號舍，時已申刻矣。坐西裳四十二號。

初九日，有雪珠，終日不霽。至二鼓方寢。

初十日，放晴。午刻交卷，頗留難。回寓時過未刻矣。

十一日，小雨，有雪珠。進磚門。雨雪少止，點名略快。歸號纔過午，坐東龍十九號。

十二日，大晴。至申刻交卷歸寓。是日，隨交隨放，並不留難。

十三日，大雪，寒甚。午後，同萬循初兄冒雪登觀象臺，不果。回寓，與天津王具區小飲（具區名任湖，本籍紹興，今家於天津，係北直戊午舉人，時年逾七十而強健，豪爽且善飲啖，少年所不及也）。

十四日，雪霽。點名甚早，搜檢少寬，歸號日尚未中，坐西重二十三號。封門在申初。是夜，月色甚明，頗寒。

十五日，晴。申刻交卷，歸。同萬循兄重到舉廠，月色滿街，柝聲不絕。

十六日，晴。辰刻，僱車出內城，仍寓舊店。

十七日，遊憫忠寺。寺在爛麵衙西南角，莊嚴潔淨，甚為壯麗。其東海棠盛開。

十八日，至王老師公寓請安，因皇后喪，不會。

十九日，姚御天遷寓至豐盛。

二十日，同年姚益兄同陶爾兄到寓，夜飯小飲，遂榻寓中。

廿一日，至觀音菴，候沈琢兄暨朱抱昆、王言、周履安諸兄。

廿二日，宋賢兄來，知其外寓賈家河沿大樹沿李宅。

廿三日，走答宋賢兄，不值，遂往粉坊、琉璃街、關帝廟，候錢虞悼兄。

廿四日，小市買灰鼠袍一件，係孫禮君兄所託。

廿五日，表甥曹景華來，盤桓竟日，同宿寓中。

廿六日，辰刻，同曹甥出進宣武門，至宛平縣，訪王琴窗，途遇董（名失）云已就河南幕矣。遂同至後宰門，飯於曹甥館中。遊拈花寺。其壯麗莊嚴不下憫忠寺。再出得勝門柳蔭中，行里許，入路傍小酒肆，少飲薄醉。重入，度得勝門橋，循大堤至漱芳啜茗。見白鷺成行飛翔，飲啄於田野中。及別景華，歸寓時已薄暮矣。

廿七日，飯前，同曹表兄至琉璃廠買彫角小刀。午刻，同支、錢兩君入西安門，至光明殿，登天元閣。此係故明萬歷時所建，為修真設醮之所，中供金身玉帝像。其制度悉仿大內，壯麗非他寺觀可擬。再過護國寺。是日正值廟市，百貨

具陳，目不暇給。

廿八日，同曹表兄往小市，買氈衣，其價甚昂，不買。

廿九日，往琉璃廠，買柿漆扇。

四月初一日，往王老師公館請安。

初二日，同支廷兄到正藍旗官學陶爾音齋中，留飲，至晚始回。

初三日，至土地廟斜街全浙會館，侯同鄉諸友，遂遊廟市，買貂鼠畫卷。

初四日，清晨，遊小市，買馬鬃、扇套等。

初五日，清晨，買紗袍套。

初六日，往前門果行，買葡萄、杏仁等物。

初七日，至天壇北首觀金魚，池雖小而甚多，金魚充牣其中。

初八日，再往憫忠寺，觀浴佛會，士女雜遝，遊人頗多。

初九日，天明榜發，知同年陳建廷已中。

初十日，曹甥來寓，寄有家書。

十一日，沈琢英兄來約同舟出京，遂同往牛血衚衕與建兄道喜。

十二日，同琢兄在楊梅斜街寫船不成，緣欲獨叫，故爾。

十三日，同曹表兄再往船行寫船，亦無船可僱。

十四日，李行陳夥計到寓攬載票，已寫定而去。

十五日，清晨，陳夥計因船小來回，另僱朱子文船。

十六日，曹甥僱小車五輛，每輛三百五十文老錢。

十七日，辰刻，登車出沙窩門。至花園，打尖。稿村，啜茗。申刻，至張家灣下船。同舟為姚御天、曹汝咸、褚紹可、支廷揆、錢廷耀、沈琢英。

十八日，天明放舟，灤縣馬頭朝飯。靳家莊宿。

十九日，天明行，河西務守風。

二十日，天明行，陳家漣守風。申刻，風緩，行十里。楊村宿。

廿一日，早行，午刻至天津關。萬循兄到船來望。

廿二日，早到查宅奉候循兄，飯後開關行至楊青驛，宿。天大雷電，有雨。

廿三日，早行，至潰流中飯。長屯宿。

廿四日，早行，至諸官屯守風。風淨又行十里。流河驛宿。

廿五日，早行，至青縣，買菜。團魚灣守風。未刻，開行。興濟宿。

廿六日，早行，至滄州，入城。東南隅有藥王廟，市甚鬧，遊女頗眾。午後，開船。至磚河驛，宿。

廿七日，早行，風順，至泊頭。有藥王會，兩岸士女絡繹。十里，新口，一名七里壩，有董仲舒廟。再二十里，油坊，宿。

廿八日，早行，至蓮兒窩，藥王會亦盛鬧，岸上遊人如蟻，河中渡船如織。晚泊安陵，宿。

廿九日，早行，下老君堂朝飯。申刻，至德州，過浮橋，泊崖下，上岸。有雨，不及進城，遂宿崖下。是夜，兩大船漏，竟夕不能安寢。

三十日，早行，四女寺朝飯。夜至青州廠，宿，已三鼓矣。

五月初一日，早行，鄭家口買菜。柳林鋪宿，有蚊。

初二日，早行，武城縣買菜。啖杏。其地有莞爾亭、弦歌臺。飯後至渡口，有三教寺，羅漢像甚莊嚴，中坐釋迦佛，東首李老君，西首孔老君，即我夫子也。且上註：信女李異馨管。更屬可笑。是日，水急風逆，且行且泊，至下草寺，又行二里許，見雲氣風色甚惡，遂泊。是夜，同泊十二舟，終夜金鼓不絕。

初三日，早行，油坊鎮買菜。何家窯宿，一名插花寺。

初四日，早行，寶塔買菜。登靜樂閣。閣建於故明嘉靖十年。飯後，至臨清，上岸，買羊絨。褚紹兄邀至大寺啜茗，且觀劇，演高懷德夫妻下棋盤鎗，殊可笑。

初五日，早行，戴家灣開板正啓，過閘，朝飯。至土橋閘，日尚未午。舟中小飲。申刻，上岸買絨衣。板竟不啓。

初六日，土橋守閘。午後，同支廷兄酒肆小飲。

初七日，土橋守閘。午後，同沈琢兄酒肆小飲。

初八日，卯時，板啓，上閘行十里，至梁鄉閘。泊船，守閘。

初九日，不啓板。飯後，同曹表兄、支廷兄至王勇屯，有集，啜杏甚佳。屯離閘三里許。

初十日，申刻，板啓，過閘。行三里許，有大風，宿王勇屯。

十一日，曉行，二十里至永通閘，一名新閘。朝飯，戌時板啓，上閘行十里，十里鋪，五里，五里鋪，四里，通濟閘。時已過三鼓。閘屬聊城，離東昌府一里。

十二日，早起，登岸。市廛稠密，百貨具陳，杏大如拳，味甚甘美。辰刻，板開，上閘行二十里，李海務閘。酉刻完，總河官眷奪溜掀板，閘牌子需索不遂，與

舟人打架，過關時已更餘矣。

十三日，曉行，十里周家店關。李海務牌子來稟，且驗傷。鄰舟舟人扑其十板，諸船攢湊，納賄於關官，乃得免究，許明日放行。

十四日，關上有小集，市中見賣繭者，黃色為多。下午，舟次觀女伎走賊。酉刻，板啓，乘日行八里，官窯口宿。

十五日，早行六里，七級下關。關上煙火千家，係陽穀巨鎮。辰刻，板啓，行三里，七級上關。午刻，板啓，行十三里，阿城下關。申刻，板啓，行一里，阿城上關。入市買膠。燈上，板啓。乘月登舟上關，行七里，荊門下關。板未下，過關行二里，荊門上關，亥刻，板啓，過關，泊。

十六日，曉行，十里，張秋鎮。買菜朝飯，形勢雄壯，兩岸人煙稠集，舟檣鱗接，真雄鎮也。五里，掛劍臺。十里，沙窩。十里，壯猷臺。十里，戴廟關。薄暮，有陣雨。散風起，西有長虹，映月而成白。

十七日，大風，不啓板。午後，同沈琢兄肆中小飲，酒家竟不識長生果、松子為何物。

十八日，辰刻，板啓，上關，行二十五里，安山關。上流湍急。酉刻，板啓，行十五里，王仲口。月下行十五里，靳家口關，宿。

十九日，辰刻，板啓，行八里，王八老口。五里，石頭口。五里，袁口關。水淺舟膠，薄暮登西岸，小街有市。

二十日，放舟泊東岸，南街有集。東市稍有于氏義田碑，明萬曆三十四年立。有于三樂者捐高腴田一千二百畝，市房百間，以贍養孤貧族眾。後有規約數條，亦井井可觀。

廿一日，酉刻，板啓，上關，行五里，劉家口。五里，朱家灣。四里，開河關，泊。

廿二日，登岸，關西有市。市稍小橋流水頗似江南風景。觀音堂中蜜蠟、枸杞二株，圍三尺餘，徑八寸，枝幹扶蘇亦數百年物。

廿三日，午刻，板啓，行十二里，北柳林關，不下板，五里，南旺鎮分水，龍王廟殿宇巍煥(峨)。自此，水向南流。五里，南柳關。午刻，板啓，下關，行五里，孫村。五里，寺前鋪關。板啓時，已上燈矣。下關，宿。

廿四日，早行，八里，大長溝。五里，小長溝。五里，白嘴兒。十里，虎頭灣。

閘板正啓，下閘，十里，耐老坡。五里，安居鎮。五里，十里鋪。十里，草橋閘。有橋無閘。二里，天井閘。板已封矣。向例，每年七省漕艘盡已過淮，總漕隨即進京復命，過此閘則將板封固，俟漕艘過盡南柳閘，則將南柳林板釘封，然後飛馳來開此閘。若南柳林閘必俟漕艘盡出臨清口始開。

廿五日，守板，入濟寧城，登太白樓。樓下即杜甫南池大街。陳氏宅有巨槐一樹，蔭庇十餘家。

廿六日，午後，過永豐巷、稅務街、雞市口、布市口。閘閘接連，方圓二三里，許東省一大都會也。時方疾疫，麻衣素冠，相望於道。

廿七日，飯後，入城，過總河轅門及道憲署前，啜茗於仙露居。申刻，歸舟。聞寺前鋪漕艘擱淺難行，開板正未有期。同來南下諸舟紛紛有另行買棹而歸之議。

廿八日，飯後，再過仙露居小飲。又聞有不出三日必啓板之信。

廿九日，晨往小閘口望南來舟楫甚多。申刻，有飛騎來報漕艘俱已往北，南柳林死板已下，會牌開閘。過閘，里許，小閘板亦啓，見燈光散亂，人聲喧嚷，來船絡繹，首尾相啣而上，至四鼓方下閘。連夜行五里，趙村閘。八里，石佛閘。皆不下板。九里，華家淺，一名桃花淺，天明。

三十日，九里，新店閘。八里，新閘。八里，仲家淺，有仲夫子祠。五里，帥家莊閘。五里，魯橋閘。六里，棗林閘。十五里，南陽鎮。煙火數千家，舟楫縱橫，充斥河道。十里，利建閘。十里，邢家莊橋頭閘。宿，有蚊。自濟寧以下，漕船已過，皆不下板。

六月初一日，曉行，十里，石家口。十里，馬家口。十里，徐家口。十里，滿家口。十里，珠梅閘。十里，舊大王廟。十里，新大王廟。十里，楊莊閘。五里，夏鎮。天雨，暫泊。屬沛縣，亦巨鎮也，不下南陽。雨歇，再行十里，西灣，一名劉昌莊。十里，彭家淺。十里，擺渡口。十里，赤山。五里，鄒山，宿。

初二日，早行，十二里，豬姑莊。十里，吳家橋。十里，韓莊。十里，三調灣。五里，得勝新閘。十二里，張莊閘，一名路梁閘。八里，萬莊閘，一名萬年閘。十里，丁廟閘。十里，頓莊閘。六里，侯仙閘。十二里，台莊閘。九里，梁林莊。九里，梁王城閘。十二里，沭溝河清閘。十里，王市口河定閘，宿。

初三日，早行，五里，下擺渡。五里，上灘。十里，徐塘口河成閘。十里，二郎廟。十二里，貓兒窩。十里，馬莊。十里，魚頭集。五里，萬莊。五里，姚王

口，一名窯灣口。十里，半片店。五里，牛頭灣。五里，八字河。五里，九龍廟。五里，皂河口。十里，蔡家莊。十里，汊河，一名交河。五里，董家溝。五里，朱城。五里，駱馬河口。十里，宿遷關，宿。

初四日，同支、錢兩君遊德聖菴。靜室清幽，滿庭花草，虞美人猶爛漫未殘。西壁聖壽寺殿宇宏壯，佛像莊嚴。寺建於洪武二年，乾隆九年重修山門。兩廊迄今尚未完功。傍芙蓉葦葦頗有清致。午刻，度關。九里，楊家莊。十里，孫家塘。十里，陸家墩。十里，蘇家樓。十里，白洋河口。十里，古城。十里，九里岡。十里，崔鎮。十里，武家營。五里，滿家溝，宿。

初五日，早行，十里，桃源縣。十里，張思中，一名司官營。十里，羅家渡。十里，三岔河汛。五里，駱家營。五里，西河城。五里，東河城。十里，清河縣。三里，渡河。五里，草壩。五里，天妃閘。二里，興福上閘。五里，興福下閘。十里，清江鋪龍王閘，閘官蕭南英公郎到船相邀，到署，留飲。登仁皇帝御詩亭，亭下即其公署。庭前多植花竹，幽致可人。漏下二鼓，登舟，即宿涯（崖）下。

初六日，早行，十五里，板閘關，朝飯後度關。十二里，盤糧廳。四里，淮安府城西門皇華亭。十里，頭鋪。十里，二鋪。十里，三鋪。十里，平河橋。十里，涇河。十里，戴家營。十里，黃浦閘。十里，寶應縣南門，泊。夜有蚊，寢不能帖席。夜半，放舟行。十里，龍舌嘴。十里，淮角樓。八里，瓦店閘。天明。

初七日，泛水，十里，大橫橋。十里，界首驛，買菜。十里，看花洞。十里，六漫，即六安溝。十里，馬棚灣。十里，清水潭。十里，大王廟。十里，高郵州御馬頭七公殿，候沈年伯留飯。申刻，開行，五里，高郵南門。十里，車邏。十里，琴鋪。十里，露筋祠。十里，腰鋪。十里，三溜閘。十里，邵伯鎮。十里，瓦窯鋪。十里，楊子灣。天明。

初八日，十里，黃金壩，一名高橋。十里，揚州鈔關。辰刻，放行，過關朝飯。五里，五里墩。五里，洋子橋。七里，三岔河。十里，八里鋪。七里，陳家灣。四里，由閘務。五里，瓜州。三里，越河江口，渡江。十八里，進京口閘。六里，鎮江城。六里，豬婆灘。四里，華莊。五里，丹徒。連夜九里，越湖，九里，姚莊。九里，新豐。九里，黃泥壩。九里，張官渡。九里，七里廟。七里，丹陽縣，天明。

初九日，小雨。七里，七里橋。十里，青陽鋪。九里，臨口閘，一名鱗口。綠岸上有兩石鱗，故名。九里，塞口。九里，大王廟。九里，呂城。九里，九里亭腰站。九里，奔牛。十里，連江橋。九里，新閘。五里，常州府西埠。五里，毘陵驛。大雨，泊舟晚飯。雨歇，放舟。五里，東埠，風順張帆。九里，丁堰。九里，戚墅。天晚有月，西天雲氣甚惡，風勢漸緊，連夜行。九里，橫林。九里，伍牧。九里，洛社。九里，石塘灣。九里，高橋。九里，黃埠墩。九里，無錫縣，天明。是夜細雨斜風，竟夕峭寒，舟中俱綿。

初十日，九里，下窯。九里，斜角。九里，新安鎮。九里，馬尾鋪。九里，望亭。九里，蘇州葑墅關北隅汛。九里，南隅汛。九里，楓橋。九里，闔門。三里，胥門。三里，盤門馬頭。三里，覓渡橋。九里，寶帶橋。日已西墜，連夜行。九里，尹山橋。九里，夾浦。九里，吳江縣汛地，巡兵刁斗甚嚴。九里，白龍橋。九里，八尺。九里，黃墩鋪，天明。

十一日，九里，平望，買銀魚，朝飯。聞市中米價騰貴，每升制錢廿三文。九里，六合鋪。九里，王家溪。六里，集慶寺。七里，王江涇。十四里，金橋。十三里，杉青閘。另買小舟，與同舟諸公別，到家時已未末矣。

進京水路計程

嘉興府至吳江縣一站九十里

三里杉青閘

十三里涇橋

十四里王江涇 出銅鑼綢綾，有日船至葑門，夜船至吳江

九里集慶 一名王家溪

九里合六鋪

九里平望 出銀魚

九里王墩鋪

九里八尺

九里白龍橋 最野

九里吳江縣

吳江縣至滄墅關一站七十二里

九里夾浦橋

九里尹山橋

九里寶帶橋

九里覓渡橋

三里盤門 蘇州府馬頭

三里胥門

三里閶門

九里楓橋 糧食聚處

九里半 路亭虎邱

九里滄墅關 出蒞

滄墅關至無錫縣一站六十三里

九里張公鋪

九里望亭

九里馬尾鋪

九里新安鎮

九里斜角官人塘

九里窯頭

九里無錫縣 出泉酒、沙泥磁器

無錫縣至常州府一站九十里

九里黃婆墩

九里高橋

九里潘葑鎮

四里石塘灣

九里洛社

九里五牧

九里橫林

九里戚市堰

九里丁堰

九里白家橋

九里常州府

常州府至丹陽縣一站八十里

九里新閘

五里連江橋

九里三里菴

三里奔牛 從此出孟河七十里至大江

九里腰站鋪

九里呂城

九里塞口淺

九里麟口淺 岸有二石麟

九里青陽鋪

二里七里橋

七里丹陽縣 出茅朮、料絲、離鄉草麥柴扇及匾對文具諸物。從此陸路由句容日半可到南京。

丹陽至鎮江府一站七十三里

七里七里廟

九里張官渡

二里黃泥鎮

九里新豐 肉賤

（完）

